

特集：合理的配慮—図書館でのさらなるサービスのヒント

図書館への感謝と期待

村上 由美

図書館への思いの丈を綴ってほしいというお話をいただき、幼い頃から本や図書館に親しんでいた身としては光栄なことと感じています。それというのも、私は文字や本がなければきっとことば自体獲得できなかつた、という私自身の生い立ちとも深く関わっています。

本が世界を広げてくれた

私は幼い頃、3歳を過ぎてても全くことばを話さない子でした。そんな私を母は心配してあちこちへ相談に出向きました。しかし、当時は母親の愛情不足というのが定説だったため深く傷ついたそうです。

一人だけ「お嬢さんのことばの遅れは自閉症など脳の機能不全によるものではないか?」と指摘した人がいて、若い心理師を家庭教師として紹介してくれました。

当時はインターネットもない頃ですから、母も心理士たちから勧められた専門書を読み、独身時代教師だった経験も参考にしながら私に接していました。しばらくして私は絵本に執着を示すようになり、母は「もしかしたらこの子は文字からことばを覚えるかも」とかすかな期待を寄せながら、絵本の読み聞かせを始めました。

するとまもなく私は黙って絵本を読むようになり、さらに少し経ったある日、突然私は「ねえ、本読んで!」と母に話しかけました。

その日以来、私は少しずつことばを話すようになりましたが、しばらくは声をうまく出せなかつたようで、たどたどしく文字と音をつなぎ合わせるように話していたそうです。

今思えば、本という媒体が私に合っていたので

しょう。ここ数年、新型コロナの影響で動画を見ることが増えてきましたが、動画だと相手のペースで流れてしまいます。その点文字は自分のペースでことばを確認できます。ですから、それまでBGMのように通り過ぎていた人のことばが初めて意味のあるものだと気づき、私の中で留まってくれたのだと思います。

しかし、母を含む大人たちの「ことばさえ話せば問題は解決するはず」という期待とは裏腹に、ことばをスムーズに話せるようになってもマイペースな言動は一向に治らず、むしろ話すようになったことで、周囲とのトラブルが増えていくことになりました。

言語聴覚士になってつくづく思うのは、ことばは飽くまでも人の内面を音や文字という形を借りて表現したものに過ぎない、ということです。土台となる人の内面は変わらないのですから、ことばを介してやり取りできるようになったことで、それまでお互い何となく見過ごしていたすれ違いが表面化することはよくあります。

例え親子であっても他人である以上、物の捉え方や考え方は異なります。身勝手なのかもしれませんが、私にとって現実世界というのは、難解かつ無理難題を押し付けてくるような面がありました。

それを癒やし、また世の中の謎を解く鍵を示してくれるのもまた本でした。私にとって、本はまさに世界を広げてくれるどこでもドアのような存在だったのかもしれませんが。

図書館という居場所

幼稚園の年長になった頃、母は私を自宅近くに